わらべうたが親子間における愛着に及ぼす影響

山本　由紀子・内田　晋子*

研究実績の概要

わらべうたを歌いながら子どもと身体的に触れ合うことで、親子間の愛着に何らかの影響が生じるのではと考え、2019年度は子育て支援広場においてわらべうたの実践と質問紙やインタビューのデータ収集を行い、2020年度は得られた結果の分析を行う。

2018年度から行っていた親子のふれあい遊びを助成金取得により2019年度から約１か月に１回開催とした。2019年度は、講座参加1回目と複数回参加後に吉田ほか（2013）の育児不安尺度10・11か月児の母親用モデルを基にした質問紙への回答をしてもらい、さらに複数回参加者にはインタビューを行った。

実践を行った子育て支援広場の方針を尊重し、予約や人数制限、実験協力の謝礼周知等を行わなかったため、参加人数は各回かなりばらつきがあった。しかし、回を追うごとにリピーターが増加、その口コミ等で全体の参加者数も増加した。一方で複数回参加者からのインタビュー協力があまり多く得られなかったため、データ数を十分収集することができなかった。この点については、今年度も実践とインタビューの追加を検討している。

インタビュー参加者だけではなく、各回の参加者による質問紙等からも興味深い回答を得ることができた。実践している側としては、知らない歌であることもあるが、中々母親自身が歌うということが難しいように見受けられた。しかし、複数回参加した参加者の中には、自宅でも子どもと歌って遊んでみた、泣き止まずにいた子どもに歌ったら泣き止んでくれた、など生活の中にもわらべうたが溶け込み始めている様子を把握できた。実践するに当たり、定番のわらべうたをいくつか入れてみたり、その日に行ったわらべうたの歌詞や楽譜をまとめたプリントを配布したりしたことがその一助になったと考えられた。また、子どもが笑ってくれた、楽しそうだった、ということに喜びを感じた母親が多く、講座の満足度も高かった。この結果については改めて今年度分析していく予定である。

得られたデータの分析は今年度行う予定のためまだ明確な分析結果が得られていないが、子育てに困り感を強く抱えている母親の方がわらべうたの効果を強く感じていたようであった。子育てにおいて配偶者をはじめとする周囲の協力があまり得られていない母親の方が、そうではない母親よりもわらべうたの効果を実感する場面があり、それによってわらべうたを生活の中に取り入れようとしている可能性が示唆された。現代の子育てによって生じる母親の孤独感や困り感を、わらべうたを子どもと歌って遊ぶことによって軽減できる可能性がある。今後は得られたデータを分析し、自由記述と合わせて定量的にその変化を明らかにしたい。

＊客員研究員　飯田女子短期大学（～ 2020年３月31日）
平安女学院大学（2020年４月１日～）

報告